

平成25年2月20日

# 大分偉人伝

## 第一回 池中 康雄（中津市出身）

昭和一〇年、当時のマラソン世界最高記録を樹立した池中康雄選手を、皆さんはじ存じるうか。池中選手は、大正三年、中津市で五人兄弟の長男として生まれた。旧制中津中学（現在の中津南高校）に入学後、本格的に陸上をはじめ、各種大会で活躍した。当時、中津市耶馬溪町から久住山麓の「寒の地獄」までのおよそ七〇キロの道のりを走破したという逸話が残っている。昭和七年、池中選手は東洋大学に進学し、箱根駅伝に六回（五年連続）出場した。昭和一〇年の第一六回大会では五区山登りにおいて、東洋大学初の区間賞（コース変更に伴い区間新記録）を得ていている。昭和一〇年四月三日、東京の神宮競技場（現在の国立競技場）において、翌年に開催されるベルリン五輪のマラソン代表の選考レースが行われた。池中選手は当時の世界最高記録を二分以上も縮める一時間二六分四四秒のタイムで優勝を飾った。その結果、池中選手はマラソン代表候補の一人に選出され、一月三日の最終選考レースで代表の座を争うことになった。しかし、そんな池中選手の前途洋洋たる競技生活に突然の試練がおどすれる。最終選考レースを目前にしていたある日、池中選手のもとに郷里から弟の重態を知らせる電報が届く。池中選手は急遽中津に帰り、弟の命を



当時2時間26分44秒の世界最高記録を樹立

救うため大量の輸血をした。その後、東京に戻って練習を再開したものの調子が上がりず、体調が戻らないままレースに出場した。当時のマラソン代表枠は現在と同じ三人で、最終選考で上位三人に入らなければならなかつた。しかし、レース途中で身体に異常をきたした池中選手はそのまま途中棄権し、五輪出場の夢は幻に終わった。レースの結果は、四月三日池中選手が出した記録を一秒上回る一時間二六分四一秒の世界最高記録で優勝した孫基楨選手と、日本大学の鈴木房重選手、明治大学の南昇蔵選手の三人がマラソン代表に選ばれた。翌年のベルリン五輪では孫選手が金メダル、南選手が銅メダルを獲得している。その後、池中選手は昭和一五年に開催予定であった東京五輪のマラソン代表を自指したが、次第に激化する戦争の影響により大会は中止となつた。大学を卒業した池中選手は、戦争も終わりに近づいていた昭和二〇年六月、郷里・中津に帰つて母校・中津中学で教師の道をスタートし、陸上競技部の顧問となる。

池中氏は平成四年二月一日（七十七歳）の世を去つた。しかし、地元ではその功績を讃えられたため、池中氏に關係する有志で顕彰会を結成し、東中津駅（つばり豊本線）近くに、平成一〇年一月、池中氏を顕彰する石碑を建立した。表面には「マラソン世界最高記録樹立 一時間二六分四四秒」と書かれ、裏面には池中氏の功

池中氏（以後、池中氏といつ）の厳しく指導により、中津中学陸上部は九州大会において優勝常連校となつた。池中氏は自分がかつてマラソン世界最高記録を出して五輪の代表候補だったことは一言も口にしておらず、当時の教え子たちは後年になってからその事實を知つたという。

池中氏は、教師の傍ら日本陸上競技連盟の役員を歴任するなど、その後の日本陸上界の発展に大きく貢献した。とりわけ、戦後の早い時期からランナー育成のためのマラソン大会を大分県で創設するため心血を注いだ。毎年一月初旬、新人ランナーの登竜門として知られる別府大分毎日マラソン大会、いわゆる別大マラソンの創設者は池中氏である。昭和二七年に第一回大会が開催されて以来半世紀以上の歴史を刻んでいる。そして、池中氏の熱い思いは、総合順位に関係なく大分県出身者の一位の選手に贈られる「池中杯」という賞によって今日に受け継がれている。また、別大マラソンが始まった昭和二七年の一月には、いわゆる九州一周駅伝も第一回大会が開催されたが、池中氏はこの駅伝の創設者の一人でもある。

# 大分県公高教

昭和45年2月17日  
第三種郵便物認可

績や経歴が刻まれている。奇しくも石碑が建立された平成一〇年には大分で小学校の道徳副読本『大分の先人たち 心をそだてる物語』が刊行され、本の中でも福沢諭吉、滝廉太郎、双葉山といつた大分県出身の偉人・著名人とともに池中氏(「ゴール自ざして走り続けた池中康雄」)が紹介されている。

※ 東洋大学 陸上競技 部公認 H P 「輝け 鉄紺！」

より引用。



別府大分毎日マラソン記念碑  
(写真提供：東洋大学広報課)